

パニウム - 第二十番

ダニエル書第11章の順序と2025年の警告

Jeff Pippenger

2026-03-02

10節から16節を成就した歴史に対する先駆者たちの適用は、幻を成就させたローマが紀元前200年、すなわちパニウムの戦いと同年に現れたことを特定した。そして私は、2025年に、トランプと教皇レオの就任とともに、ローマが現れ、幻を成就させたと示唆している。2025年は、教皇と大統領が同一年に就任した唯一の年である。2025年には、見ようとするすべての者の前に、獣とその像が掲げられた。先駆者たちとは異なり、私は、これらの節を最初に成就した歴史ではなく、節の順序を適用している。私はその歴史には同意するが、節の枠組みを歴史で定めるのではなく、歴史の枠組みとして節の内部の順序に依拠している。この二つのアプローチはいずれも正確であると主張する。

マカバイ人の革命

マカバイに関する叙述の筋も、同様の仕方で適用する。紀元前167年のマカバイの反乱は、紀元前200年のパニウムの戦いのかなり後であり、また、紀元前63年にポンペイウスがエルサレムを征服したよりもはるか以前であった。第十六節において、紀元前63年のポンペイウス将軍によるエルサレム征服から始まるその筋は、イエスが十字架に付けられた時に在位していた皇帝ティベリウスにまで至る。第十一章二十二節には、十字架とティベリウスが示されている。

また、洪水のような軍勢によって、彼の前から彼らは押し流され、打ち碎かれる。まことに、契約の君もまた打ち碎かれる。ダニエル書 11:22.

第十六節における紀元前63年のポンペイウス将軍によるエルサレム征服と、第二十二節における西暦31年の十字架とは、日曜遵守法の象徴から始まり、日曜遵守法の象徴で終わる一つの預言の線を表している。第二十三節は本文に一つの区切りをもたらし、したがって第二十二節を、第十六節に始まったその預言の線の終点として画定する。第二十二節におけるその線の明確な終止に加え、第二十二節が第十六節において示されているのと同様の道標を象徴しているという事実が伴っており、これによって、第十六節から第二十二節までが独立した一つの預言の線であることに対するアルファとオメガの証しを与えられる。

これに、十五節と十六節がセレウコス王国からローマの勢力への移行を画していることを加えるなら、十五節のセレウコス王国から十六節のローマへと、連続性に断絶があることが明らかとなる。さらに、十六節から二十二節に至る叙述は、明確に孤立した単一の預言的系列として示されている。十六節はユダヤを支配することになる次の勢力を提示し、それによって、二十三節の場合と同様に、預言史の転換を画している。この系列は日曜法の象徴をもって始まり、また終わる。そして、その系列は十一章の二十二節で終結する。

スミスと三人のカエサル

十六節が日曜法を表しており、二十二節も同様であるという事実は、この二つの節を相互に照応させることを要請する。ユライア・スミスは二十三節について注解し、それが、二十二節における十字架の直後に続く歴史を表すのではなく、先行する諸節の歴史叙述へさらに遡って始まる歴史を表している理由を説明している。

第23節. 彼と盟約が結ばれた後、彼は欺瞞的に事を運ぶ. というのは、彼は台頭し、少数の民をもって強くなるからである。

ここで言及されている、同盟が結ばれる相手である「彼」は、第14節以来、預言の主題となっているのと同じの権勢でなければならない。そして、これがローマの権勢であることは、すでに述べたとおり、ローマ帝国を相次いで統治した三人、すなわちユリウス・カエサル、アウグストゥス、ティベリウス・カエサルにおけるこの預言の成就によって、議論の余地なく示されている。第一の者は、凱旋して自国の要塞に帰るとき、つまづいて倒れ、もはや見いだされなかった（第19節）。第二の者は課税者であり、王国の栄光のうちに治め、怒りによってでも戦いによってでもなく、自らの寝床で平安に死んだ（第20節）。第三の者は偽善者で、人物として最も卑劣な者の一人であった。彼は平和裏に王国を掌握したが、その統治も生涯も暴力によって終わった。そしてその治世に、契約の君であるナザレのイエスは十字架上で殺された（第21、22節）。キリストは決して再び打ち砕かれたり殺されたりすることはない。ゆえに、他のいかなる政体においても、また他のいかなる時代においても、これらの出来事の成就を見いだすことはできない。ある者たちは、これらの節をアンティオコスに適用し、ユダヤの大祭司の一人を「契約の君」と見なそうとするが、大祭司がそのように呼ばれたことは決してない。これは、アンティオコスの治世をダニエル書8章の小さい角の成就に当てはめようとするのと同種の論法であり、また同じ目的、すなわち、再臨の教理が聖書の教理であり、キリストが今や戸口に立っておられることを示す強固な証拠の連鎖を断ち切るために提示されているのである。しかし、その証拠は覆すことができず、その連鎖は断ち切ることができない。

「帝国の世俗的事件をたどって七十週の終わりまで私たちを導いたのち、預言者は23節において、ローマ人が紀元前161年のユダヤ人との同盟によって神の民と直接に関係を持つようになった時代へと私たちを立ち返らせる。そしてその時点から、私たちは一連の出来事を直線的にたどって、教会の最終的勝利と、神の永遠の王国の樹立へと導かれる。ユダヤ人はシリアの王たちによって甚だしく圧迫されていたため、ローマへ使節を送り、ローマ人の援助を求め、また彼らと『友好と同盟の契約を結ぼう』とした。第一マカベア記8章; Prideaux, II, 234; Josephus' s Antiquities, book 12, chap. 10, sec. 6. ローマ人はユダヤ人の願いに耳を傾け、次のような文言による布告を彼らに与えた。」

「ユダヤ民族との援助および友好の同盟に関する元老院決議. ローマに隷属する者は誰であれ、ユダヤ民族と戦争を行うこと、また、そのようにする者を、穀物、船舶、金銭を送ることによってであれ援助することは、いずれも違法とする。もしユダヤ人に対して攻撃が加えられるなら、ローマ人はその能力の及ぶ限り彼らを援助するものとする。さらに、もしローマ人に対して攻撃が加えられるなら、ユダヤ人は彼らを援助するものとする。ユダヤ人が本同盟に何かを付け加え、またはこれから取り去るこ

とを望むときは、そのことはローマ人の共同の同意をもって行われるものとする。かくしてなされた一切の付加は、効力を有するものとする。」 「この決議は」とヨセフスは言う、「ヨハネの子エウポレモスと、エレアザルの子イアソンとによって記された。ユダが民族の大祭司であり、その兄弟シモンが軍の将軍であったときである。そして、これはローマ人がユダヤ人と結んだ最初の同盟であり、このような仕方で行われた。」

この時、ローマ人はなお小さな民であり、語が示すとおり、欺き、すなわち狡猾さをもって事を運び始めた。そしてこの時点から、彼らは後に達することになる権勢の高みへと、着実かつ迅速な上昇を遂げた。ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』270、271頁。

二十二節の十字架は、その系列の冒頭にも置かれている象徴でもって当該系列を終えているばかりか、次の節は十字架に先行する歴史へと戻り、パニウムの後およそ三十年、そしてローマがエルサレムを征服するおよそ百年前にまで遡る。ここでスミスが紀元前161年と特定するユダヤ人の同盟という道標は、他の先駆者たちは紀元前158年と特定している。ここで私がとくに注目しているのは年代そのものではなく、十六節から二十二節が、日曜法がその系列のアルファでありオメガであるような預言的歴史の系列を表しているという点である。そして十六節から二十二節の系列が提示されると、二十三節は、その系列に内在する歴史を反復し、さらに拡大して述べる。二十三節により表象される預言的歴史の系列はマカバイ人の歴史であり、マカバイ人の歴史はアメリカ合衆国の歴史と完全な並行関係にある。

二つの王朝

マカバイとは、アンティオコス四世エピファネスの治世に始まったセレウコス王国に対する反乱を指す。その反乱は北方のセレウコス王国に対するもので、勝利に終わり、その結果、最終的に西暦70年のエルサレム破壊へと至る時期における二つのユダヤ王朝のうちの一つの成立へとつながった。第一の王朝はハスモン朝、第二はヘロデ朝であった。ヘロデ朝は、北方のセレウコス王国からの解放後における第二のユダヤ政権であった。それはローマの体制と直接結び付いていたが、これに対してそれ以前のハスモン朝は本質的にユダヤ的であった。ハスモン朝は紀元前141年に始まり、紀元前37年にヘロデ朝が始まり、西暦70年まで続いた。

諸王朝は、古代における文字通りの「栄光の地」たるユダヤの統治を指す。マカバイの反乱は紀元前167年から160年にかけてであった。紀元前164年には、マカバイ派がアンティオコス・エピファネスをエルサレムから駆逐し、アンティオコスによる神殿の冒涇の後に、神殿を清めて再奉献した。しかし、北方のセレウコス勢力が完全に打ち破られ、ハスモン朝が成立したのは、紀元前141年になってからであった。

ヘロデ王朝はこの系列を解く鍵である。というのは、イエスの誕生の時に幼児の殺害を命じたのはヘロデ大王であり、イエスが死んだ時にはその子が支配していたからである。ヘロデ大王は父であってユダヤの王であったが、その子は分封領主にすぎず、すなわち王国の四分の一を治める統治者で、王というよりはむしろ総督のような存在であった。ゆえに彼には権限が欠けており、キリストを十字架につけるにあたってはピラトの権威に頼

らざるを得なかった。イエスの誕生は、イエスの預言の系列における預言的な「終わりの時」であり、その死は日曜法を表している。最初のヘロデは1989年を表し、最後のヘロデは日曜法である。父ヘロデから子ヘロデへと至る筋が、キリストの預言的系列をなす。

マカバイ家の系譜は、ユダヤ人にギリシアの風俗と文化、ならびにギリシア宗教を強制した北の王に対する、勝利を収めた反乱から始まる。ハスモン朝の成立は1798年を指し示していた。なぜそうなのか、とあなたは問うかもしれない。もし一方の王朝が、キリストの誕生時におけるヘロデ朝のように、預言的な「終わりの時」に始まるのであれば、預言的必然性として、もう一方の王朝も同じ始まりを持つことになる。この二つの王朝はいずれも、キリストの誕生を「終わりの時」として適用するなら、「終わりの時」に始まる。しかし、愚かな者たちは、その「終わりの時」に伴って封印が解かれた光を見ることが決してない。

キリストの時代と同様に、私たちの時代においても、聖書の読み違い、あるいは誤解釈が起ころう。もしユダヤ人が、熱心に、祈りの心をもって聖書を学んでいたなら、彼らの探求は、その報いとして時についての真の知識を、いや時ばかりでなくキリストの現れ方についての真の知識をも得ていたであろう。彼らは、キリストの栄光に満ちた再臨に属する事柄を、その初臨に帰してしまうことはなかったであろう。彼らにはダニエルの証言があり、イザヤおよび他の預言者たちの証言があり、モーセの教えがあった。そして、ここにまさに彼らのただ中にキリストがおられたのに、なお彼らは、キリストの来臨に関する証拠を求めて聖書を探っていたのである。しかも彼らは、自分たちが行うであろうと預言されていた、そのまさに事柄を、キリストに対して行っていた。彼らはあまりにも盲目で、自分たちが何をしているのかを知らなかった。

第一、第二および第三天使のメッセージに含まれる試練のメッセージを経験していないため、今日、すなわち1897年においても、多くの者が同じことをしている。これらのメッセージがなお将来の事柄であることの証拠を求めて聖書を探究している者もいる。彼らはそれらのメッセージの真実性を裏づけるものを寄せ集めるが、預言史における本来の位置をそれらに与えることができない。それゆえ、そのような者たちは、メッセージの位置づけに関して人々を誤導する危険にある。彼らは、終わりの時、すなわちそれらのメッセージをいつ位置づけるべきかを、見ても理解してもいない。神の日は忍び寄る足取りで来つつある。しかし、賢明で偉大であると見なされている人々は、「高等教育」について饒舌に論じている。彼らはキリストの再臨のしるしも、世の終わりのしるしも知らない。Paulson Collection, 423, 424.

キリストの誕生を「終わりの時」と同定し、ひいてはマカバイ家の系譜を終末の時代における現在の真理の文脈へと導入する鍵であるとするのは、当該箇所のみならず中心にキリストを据えることであり、しかもそれ自体、この適用が妥当であることの証左ともなる。

マカバイ家の系譜は霊的な栄光の地を例証しており、その例証は、栄光の地の住民が北の王の政治的・宗教的支配から離脱する時期に始まる。ハスモン朝の成立へと至るマカバイの反乱は1776年を表し、マカバイによって成し遂げられた北の王に対する反乱は独立戦争を表した。1776年から1798年に至る二十二年間は、1798年の終わりの時におけるハス

モン朝の成立へと至ったマカバイの反乱を表し、そのハスモン朝は、1989年の終わりの時にヘロデ朝が始まるまで続いた。ヘロデ朝は西暦70年のエルサレムの滅亡まで続いた。

この歴史の線において認識すべき重要点は二点である。すなわち、これは現代の栄光の地を予表する古代の栄光の地の例証であり、また、ローマが初めて栄光の地を征服する十六節から始まる歴史の線の中に起点を置き、そのことによってこの線の主要主題が特定されている、ということである。十六節から二十二節に至る歴史の線は栄光の地を表しており、その文脈は間近に到来する日曜法である。この線はまた、両王朝政府に影響を及ぼす二つの礼拝者の階級をも表している。サドカイ派は人数こそ少数であったが、両王朝期において概してユダヤの宗教的・政治的体制を支配していた。宗教制度は祭司職によって管理され、その祭司職もまたサドカイ派とファリサイ派の双方の影響を受けていた。ハスモン朝とヘロデ朝の政府はいずれもファリサイ派とサドカイ派の影響下にあり、これら二つの王朝は、1798年から日曜法に至るまでのアメリカ合衆国の政府を表している。

パリサイ派とサドカイ派は、奴隷制の問題に対する立場によって区別される二つの政治的傾向の党派を表している。民主党は奴隷制擁護、共和党は奴隷制反対であり、両者はともにアメリカ合衆国の立憲政府の政治機構に関与する。かの政府は黙示録十三章の「地からの獣」であり、その地からの獣の外的歴史はその共和主義の角によって表され、内的歴史はプロテスタントの角によって表される。角は獣の上で分かたれている。というのも、その獣は、国家の角を教会の角から分離する憲法そのものであるからである。しかし、両角は歴史を通してともに進む。共和主義の角には、奴隷制を支持するか反対するかという二つの影響力があり、プロテスタントの角には、第七日安息日を支持するか太陽の第一日を支持するかという二つの影響力がある。

パニウムの戦いからおおよそ三十年後、マカバイ人はアメリカ合衆国の歴史を、聖書預言における第六の王国として位置づける。次いでおおよそ一世紀後、エルサレムが征服される時、十字架を予表しつつ、第十六節が成就する。ローマが世界を掌握するにあたり制圧する三つの障壁のうち、ユダヤは第二である。ポンペイウス将軍は紀元前65年にシリアを、続いて紀元前63年にユダヤを征服した。アウグストゥス・カエサルは、紀元前31年のアクティウムの海戦で第三の障壁を征服することになる。この歴史は、第十六節から二十二節に至る一連の記述において示されている。

十字架の時点までには、マカバイの歴史はほぼ二百年にわたり進行していた。ユライア・スミスは、二十三節におけるユダヤ人との同盟によって表象される歴史は、二十二節の十字架の歴史のほぼ二百年前に生じた歴史的起点に対応づけられるべきであると指摘している。二十二節の十字架の歴史は十六節と整合させねばならない。なぜなら、十六節もまた日曜法だからである。これは、ユダの麗しい地の歴史であるマカバイの系列は、十六節の日曜法よりもはるか以前に始まっていることを意味する。

ミラー派の歴史が十四万四千人の歴史を例証していると理解するならば、1798年におけるミラー派の終わりの時と、1989年における十四万四千人の終わりの時とを対応させることができる。このようにすると、第一の天使と第二の天使の歴史を、第三の天使の歴史に重ね合わせることになる。1798年と1989年は、ダニエル書11章40節の歴史におけるアルファとオメガの道標である。

第四十節は「終わりの時」から始まるが、それが1798年であることは容易に立証できる。また、正しく理解されるなら、1989年のソ連の崩壊は第四十節を成就しており、その成就もまた「終わりの時」であった。一つの節の中に二つの「終わりの時」があるのであり、しかもそれはマカバイ家の系譜が記されている同じ章においてである。ハスモン朝へと至ったマカバイの反乱は、1776年から1798年までの二十二年間を表している。1798年にハスモン朝が始まり、1989年にヘロデ朝が始まった。

ダニエル書十一章十節は一九八九年を指し示し、十六節は日曜法である。これらの節に内在する歴史の筋は、三つの戦いと、南の王の没落、そして預言的歴史へのローマの登場を表している。さらにそこには、黙示録十三章の地から上って来る獣が「小羊のような二本の角を持ち」「竜のように語る」に至る際に生ずる変化を予表する、二つの王朝の系譜も含まれている。順序として、第一のユダヤ王朝は小羊であり、第二のローマ王朝は竜である。第一の王朝はユダヤであり、第二はローマであった。ユダヤであれローマであれ、地から上って来る獣には二本の角があった。

ユダヤ王朝はプロテスタントの角を表し、ローマ王朝は共和政主義の角を表す。両方の角はまた、預言的な二分法を有している。サドカイ人とパリサイ人は、奴隷制擁護の民主党と奴隷制反対の共和党との対置の枠組みを与えるとともに、賢い乙女に対置される愚かな乙女の二重の区分をも表している。パリサイ人は愚かな乙女として第一の失望においてふるい落とされ、サドカイ人は第二の宮清めにおいてふるい落とされる。パリサイ人は、サルディスの教会のごとく、いのちがあるという名を持つと公言しながらも実は死んでおり、まず最初にふるい落とされる。次いで、神の力を否定し、真夜中の叫びの力とメッセージをも否定したサドカイ人がふるい落とされる。サドカイ人は、見過ごされつつある契約の民である。サドカイ人は、快い感情に満足している者たちである。

第一の天使のメッセージによって告げられたキリストの来臨は、花婿の到来によって表されているものと理解された。やがて来られるとの宣言のもとに広く起こった改革運動は、乙女たちが出て行ったことに相当した。このたとえにおいては、マタイ24章のそれと同様に、二つの階級が示されている。皆が自分のともしび、すなわち聖書を取り、その光によって花婿に会いに出て行った。しかるに、「愚かな者たちは自分のともしびは取ったが、油を持って行かなかった」のに対し、「賢い者たちは、ともしびと共に、その器に油を入れて携えた」。後者の階級は、神の恵み、すなわち、神の御言葉を足のともしび、道の光とならしめる、聖霊の新生と照明の力を受けていた。彼らは神を畏れ、真理を学ぶために聖書を研究し、心と生活の純潔を切に求めた。これらの者は、神とその御言葉に対する信仰という個人的経験を持っており、それは失望や遅延によっても打ち倒されることがなかった。他の者たちは「自分のともしびは取ったが、油を持って行かなかった」。彼らは衝動に駆られて行動した。彼らの恐れはその厳粛なメッセージによってかき立てられたが、真理の徹底した理解も、心における真実な恵みの御業もないまま、善良な感情の揺らめく光に満足し、兄弟たちの信仰に依存していた。これらの者は、即時の報いを見込んで大いに望みを抱きつつ主に会いに出て行ったが、遅延と失望には備えていなかった。試練が来たとき、彼らの信仰は挫け、そのともしびはほの暗くなった。『大争闘』393頁。

政治的であれ宗教的であれ、双方の勢力は真夜中の危機において賢い者たちに敵対して一致する。さて、以上を述べたうえで、本稿の冒頭で私は、諸節の流れにおける配置に基づいて第十四節を適用しており、これは諸節が示す歴史的順序とは相反する、という点を提起した。その論理は、第二十三節の配置とも整合している。道標の配置は、その歴史的成就に対応していなければならない。マカバイ時代にユダヤ人がローマと結んだ同盟が、その節をどこに適用すべきかを規定した。幻を確立する者である第十四節の「強奪者たち」は、パニウムの戦いのまさにその年である紀元前200年にそれを行ったが、その戦いと「強奪者たち」とは二つの異なる象徴である。

「盗賊たち」は叙述の一部となるが、それはパニウムの戦いの年代との直接的な結び付きを確立するためではなく、アンティオコスにまさに敗北しようとしていた弱体化した五歳のエジプト王と彼らが結んだ関係を特定するためである。彼らは、エジプト産小麦のローマ帝国への輸入が中断されることを望まなかった。脆弱な五歳のエジプト王とローマとの預言的關係こそが、その節の主題である。その介入は、1989年以前にかつてそうであったようにウクライナ教会をロシア教会に従属させることを取り込もうとするプーチンの試みに続く余波の帰結を指し示している。その試みは彼の南の王国の漸進的な衰亡の端緒となり、そして、プトレマイオスがそうであったようにプーチンが死ぬか、あるいはウジヤやナポレオンがそうであったように何らかのかたちで流刑に処されるとき、彼は預言的に退けられ、その王国はその後、より能力の低い指導者たちの連続によって取り仕切られることになる。ついで、五歳の王の時代に、教皇ローマは自らの利害の対象であるウクライナ教会を保護するために介入する。

ローマ教皇権は、ロシア正教会とウクライナ正教会のいずれかの陣営に与しているのではない。むしろ、イザヤ書四章に表象されているとおり、あらゆる陣営に立ち回って、すべての宗教団体を自らの権威の下に置こうとしている。

その日、七人の女がひとりの男に取りすがって言う、「私たちは自分のパンを食べ、自分の衣服をまといます。ただ、私たちがあなたの名によって呼ばれるようにしてください。そうすれば、私たちのそしりは取り去られます。」その日、主の若枝は美しく、栄光に輝き、地の実りはイスラエルの逃れた者たちにとって尊く美しいものとなる。そして、こうなる。シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すなわちエルサレムで生ける者のうちに名を記されたすべての者は、聖なる者と呼ばれる。イザヤ書 4:1-3

教皇制は、すべての宗教団体を掌握する。この支配は七人の女として表象されており、すなわちすべての教会を意味する。その七つの教会は「カトリック」（すなわち「普遍的」）と呼ばれることを望むが、彼らは自分の衣を身にまとうことを意図しているゆえに、明らかに神の民ではない。自らの人間的衣をまとうと望むすべての宗教団体の統一は、「エルサレムにいる者は聖と呼ばれる」とされる時に起こる。すなわち、主の枝がラオデキア的な民からフィラデルフィア的な民へと変えられる時であり、その時こそ、教皇制がすべての宗教団体の頭となるのと同じ時に、政治的諸団体の頭にも据えられるのである。

1989年、ウクライナの教会は、北の王がソビエト連邦を押し流すことの象徴であった。そしてプーチンは、かつての従属関係の回復を図り、その額にらい病を負い、自らの要求

を拒んだ宗教に対する迫害を開始する。その迫害はプトレマイオス自身の国、アレクサンドリアの都で起こったので、ローマの影響を受けるロシア国内の諸教会は、プーチンの標的となり、また彼の終局ともなる。トランプがパニウムの戦いに備えるにあたり、弱体化したエジプトの幼王の後見者との公然たる関係が、2025年に明らかにされる。紀元前200年にエジプトの幼王を保護したローマの権勢は、その時にはもはや幼王を保護しない。ローマはその幼王の終焉を助ける。紀元前200年にエジプトの保護者であったローマは、パニウムの戦いにおいてエジプトを滅ぼす者としてのローマを象徴する。

ミラー派信徒

ミラー派はローマの三つの勢力を見たのではなく、二つしか見なかったが、それでも彼らの真理は真理であった。象徴としてのアンティオコスに関する預言的論理は、当初これらの節を成就させた歴史が第十四節と第十五節の双方を紀元前200年に位置づけていたとしても、第十五節に先行する歴史において第十四節を適用することを可能にする。私は、第十六節は間もなく到来する日曜法であり、第十四節は2025年であり、第十五節はなお将来に属するパニウムの戦いであると主張している。アンティオコスは、三つの戦いすべてに彼が関与しているがゆえに、それら三つが一つの預言的な系統であることを立証するとともに、これらの節の終末時代への適用が「行に行、句に句」の方法論によって正しく区分される、という私の主張をも立証する。

アンティオコスは三度の戦いすべてに臨んだが、終わりの日々において彼は、1989年（レーガンとアメリカ合衆国）、2014年（ゼレンスキーとウクライナ）における教皇権の代理勢力を表し、さらにパニウムの戦いにおいては、イエスが常に初めをもって終わりを表すゆえに、1989年と同一の代理勢力を表す。ロナルド・レーガンは既に死して葬られているゆえ、アンティオコスの歴史的証言はミラー派の理解に照らして正確であるが、「行に行を重ねる」型の適用を規定する規則に服する。これらの節における最後の教皇権の代理勢力はトランプであり、歴史的にはアンティオコスが三つの戦いすべてに臨んだにもかかわらず、である。13節を成就するためには、トランプは二度目の選挙に敗北しなければならなかった。というのも、13節において彼は「帰って来る」からであり、かつてないほど強く、耳を貫く銃弾を受けてもなお堪えうるほどに強いからである。そして耳は、祭司が油注がれるときに血で塗られるべき部位であった右手の親指および右足の親指とともに、その対象とされた。

レーガンはトランプの型であった。1989年の「終わりの時」から数えて最後の八人の大統領の第一がレーガンであるからである。リンカーンもまたトランプの型であった。彼は最初の共和党大統領であったからである。リンカーンは、ローマと同盟した奴隷制擁護の民主党員によって暗殺されたが、ロナルド・レーガンとその教皇的な対応者であるヨハネ・パウロ二世は、ともに暗殺未遂を生き延びた。トランプは2020年、黙示録十一章七節の成就としての盗まれた選挙によって政治的に暗殺され、そして2024年には、十一節の成就として復活した。

そして彼らとその証しを終えたとき、底知れぬ淵から上って来る獣が彼らに対して戦いを挑み、彼らに打ち勝ち、彼らを殺す。... そして三日半の後、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは自らの足で立ち上がった。彼らを見た者たちの上に大

いなる恐れが臨んだ。ヨハネの黙示録 11:7, 11.

トランプの復活は、第十三節における彼の「帰還」であり、同時にローマの特質に並行するものでもあった。というのも、ローマは「七つに属する第八」であり、トランプはローマの像だからである。

かつては存在し、今は存在しないその獣は、第八のものであり、七つのうちの一つであり、滅びに至る。ヨハネの黙示録 17:11

トランプの第二期によって、彼はレーガン以降八人目の大統領となるが、かつて六番目でもあったため、教皇権と軌を一にして「八であり、すなわち七に属する者」である。八は復活の象徴であり、これは、教皇権の像としての彼が「戻る」ために、癒やされた致命的な傷を負っていなければならなかったことを強調する。

そして、獣の頭のうちの一つが死に至るほどの傷を負ったかのように見えたが、その致命傷は癒やされた。すると、全地の人々は獣に驚嘆して従った。ヨハネの黙示録 13:3

致命的な傷が癒やされると、世界は「獣に驚嘆して従う」。そして、2024年にトランプが「七つのうちに属する第八」として復活したとき、彼は「戻って来た」。全世界は彼に驚嘆して従った。

そして三日半の後、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは自分の足で立ち上がった。彼らを見た者たちの上に大いなる恐れが臨んだ。彼らは天から「ここに来てなさい」と告げる大きな声を聞いた。すると彼らは雲に包まれて天に上って行き、彼らの敵はそれを見た。黙示録 11:11、12.

2024年の選挙でトランプは「復帰」し、続く2025年には彼と教皇レオの双方が就任した。イエスは、見ようとするすべての者に、直接的かつ公正な警告をお与えになった。

それゆえ、あなたがたが預言者ダニエルによって語られた荒廃をもたらす忌むべきものが聖なる所に立っているのを見るとき、（読む者は悟れ。）マタイ 24:15.

マルコはそれをおそらくわずかに、より明瞭に述べている。

しかし、預言者ダニエルによって語られた「荒らす憎むべき者」が、立ってはならない所に立っているのをあなたがたが見たなら（読む者は悟れ）、そのとき、ユダヤにいる者たちは山々へ逃げよ。

「荒廃をもたらす忌むべきもの」は、その三つの段階それぞれにおけるローマを指す。異教的ローマ、教皇ローマ、現代ローマは、それぞれ神の民への警告のしるしである。その警告は、ローマが「聖所」に、あるいは「あるべきでない場所」にあるときに認識されるべきである。「栄光の地」は聖書における聖地を指し、アメリカ合衆国は霊的な「栄光の地」である。

主は聖なる地において、ユダを御自分の分け前として受け継ぎ、再びエルサレムを選ばれる。すべての肉なる者よ、主の前に沈黙せよ。主はその聖なるすまいから立ち上げられたからである。ゼカリヤ書 2:12, 13.

聖なる所にローマが立っているのを見るとき、主は、ご自身の契約の民としてエルサレムを最後にお選びになる。八人の大統領の最初の者であるレーガンが、聖書の預言における反キリストと秘密の同盟を取り決めたとき、それは、1989年の終わりの時以来の第八にして最後の大統領によるローマとの公然の同盟を表していた。オメガの象徴は、しばしばアルファの象徴の属性を反転させる。

2025年における教皇レオとトランプの就任は、黙示録十三章の海の獣と地の獣の間の公然たる関係を明らかにしている。レーガンとヨハネ・パウロ二世の秘密の同盟によって予表されていた、トランプとレオの公然の同盟への逆転は、紀元前200年に第十四節を成就したエジプトの幼王への支援が、終末の時代における支援の欠如を表すことを、我々に告げている。

2025年は、外的な根本的な幻または預言を確立する。というのも、それは、ダニエルが「荒らす憎むべき者」という象徴によって同定したローマを、ローマに関する警告として掲げるからである。「荒らす憎むべき者」の警告は、「荒廃」を表す破壊に先立って生起する。ケスティウスの指揮下におけるエルサレム包囲戦においては、この警告は、ローマの権威を示す旗印が神殿の聖域内に掲げられたことによって表象された。それを見て悟り、従順に都を離れた者は、包囲が再開されたとき守られた。彼らはローマの警告のしるしを見たのである。妥協したペルガモの教会、さらにその後のテアテラの教会から分離したキリスト者たちは、神の神殿に罪の人が座すのを見たとき、荒野へと逃れた。これらの証言は、終わりの日における、ダニエルが語った「荒らす憎むべき者」の警告を指し示している。

私たちは繰り返し、1888年はセスティウスの包囲戦に当たり、日曜法の危機の終結はティトゥスの包囲戦に当たることを示してきた。1880年代のブレアの「日曜法案」と、同時期に南部諸州のいくつかで施行された日曜法は、セスティウスの警告であり、同時にホワイト夫人の田園生活に関する勧告における境界線を画した。1880年代以前、彼女の勧告は、将来、田園へ移る必要があるというものであったが、1880年代以後には、田園生活はすでに成し遂げておくべき事柄とされた。教皇権の権威の印を推進するものとして1880年代に論じられていたブレア法案という警告のしるしは、9/11における愛国者法を予表していた。というのも、黙示録18章の天使が、これら両方の歴史において現れたからである。

9/11は、ケスティウスが、本来権威が置かれるべきでない聖なる所に自らの権威を据えたことの警告であった。というのも、9/11においてローマ法がイングランド法に取って代わったからである。2021年のペロシ裁判では適正手続条項が否認され、これはティトゥスの包囲へと向かうさらなる一步を示しており、その包囲は、間もなくアメリカ合衆国において到来する日曜法において終結する。この包囲は一つの期間を指している。1888年は内部のプロテスタント主義の角の反逆を指し示し、9/11は外部の共和主義の角の反逆を指し示している。最後の大統領が就任するのと同じ年に、栄光の地からの教皇の就任がなされることは、パニウムの戦いの直前に、「立つべきでない所に立つ荒らす忌むべきもの」の最終的な警告を表している。パニウムの戦いは、直ちに日曜法へ、そしてアクティウムの戦いへと通じる。アクティウムの戦いは異教ローマにとって第三にして最後の障害を表しており、その後、異教ローマはダニエル書11章24節の成就として360年間、至上の

支配を行った。日曜法において、第六と第七の王国はいずれもローマに征服され、現代ローマはその後、象徴上一時間、すなわち象徴的四十二か月のあいだ統治する。

16節において、異教ローマの最初の障害であるシリアを打ち破ったばかりのポンペイウスが、続いてエルサレムを征服する。ポンペイウスはローマの最初の二つの障害を打ち倒し、第三のものはアクティウムにおいてアウグストゥス・カエサルが征服する。現代のローマは、40節の成就として、また10節に型示されているとおり、1989年にまず南の王を征服する。その後、日曜法において、現代のローマはアメリカ合衆国とともに第二と第三の障害を征服し、続いて国際連合は直ちにその王国を教皇権に与えることに同意する。異教ローマはポンペイウスによって二つを、次いで一つを征服し、教皇ローマは1989年に一つを、そしてその次の二つを16節において征服する。ここでは、ポンペイウスが第二の征服によって標示されている。

異教ローマにとっての第三の障害がアクティウムにおけるものであったにせよ、あるいは538年にゴート族がローマ市から駆逐されたことによって表象される第三の障害であったにせよ、ローマが第三の障害を克服するとき、ローマは最高権威をもって統治する。

まことに、主なる神は、そのはかりごとを、そのしもべである預言者たちに示さないでは、何事もなさない。アモス 3:7

荒廃が到来する前に、主は、『ダニエル書』において「荒廃をもたらす忌むべきもの」として表されている警告のしるしの最終的な顕現を、必ずお示しになる。その警告のしるしとは、2025年に表されているレーガンの秘密の同盟とは対照的な、公然の同盟である。主は、まず警告をお与えにならずに裁きを下されることはなく、また、主のしもべたちへの秘められた啓示が何であり、それが誰を対象としているのかについて、アモスはきわめて明確である。

イスラエルの子らよ、主があなたがた、すなわち主がエジプトの地から導き上った全家に対して語られたこの言葉を聞け。「地のすべての氏族のうちで、わたしはただあなたがたのみを知った。それゆえ、わたしはあなたがたのすべての咎のゆえに、あなたがたを罰する。」アモス書 3:1、2。

アモスは、罰を受けることになる神に選ばれた契約の民の最後の世代に向けて語っており、これはエゼキエル書八章で太陽にひれ伏す二十五人と符合している。アモスはラオデキヤのメッセージを提示しており、それは、生ける者の審判の時に罪がぬぐい去られる期間における第三天使のメッセージである。アモスの警告は、二つの勢力の結合に基づいている。

二人が打ち合わせなしに共に歩むことができようか。

獲物が無いのに、獅子が森でほえようか。

若獅子が何も捕らえていないのに、その巢穴から声をあげようか。

そのための仕掛けが無いのに、鳥が地上の罠に落ちることがあろうか。

罠が何も捕らえていないのに、地からそれを取り上げる者があろうか。

町で角笛が吹き鳴らされて、民がおののめないことがあろうか。

町に災いが起こるのに、主がそれをなされないことがあろうか。アモス書 3:3-6。

二人が一つとなって共に歩むことについての警告は、地上から鳥を捕らえる罠という文脈の中に位置づけられている。鳥は宗教団体の象徴であり、黙示録において、教皇制はあらゆる汚れた憎むべき鳥の籠である。

そして、彼は大声をもって力強く叫んで言った。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。彼女は悪霊どもの住みかとなり、あらゆる汚れた霊の牢獄となり、あらゆる汚れた忌むべき鳥の檻となった。というのは、諸国の民はみな彼女の淫行の憤怒のぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と淫行を行い、地の商人たちは彼女の贅沢の潤沢さによって富み栄えたからである。」ヨハネの黙示録18章2、3節。

鳥籠の中の鳥は捕らえられた鳥であり、国家がローマの淫婦と姦淫を犯すとき、その国家は捕らえられた鳥となる。そして、ほかのすべての預言的な鳥よりも上に掲げられるその鳥とは、その三重の家が建てられ、彼女の居所、すなわちシナル、すなわちバビロンにおいて、日曜法に際して確立される権力である。それは1798年に致命的な傷を受けた鳥、すなわちゼカリヤの述べるところではその籠の上に鉛の蓋を置かれた鳥であるが、その後、心霊主義と背教的プロテスタンティズムの鳥によって高く掲げられた。

そのとき、私に語っていた御使いが進み出て、私に言った。「今、目を上げて、出て行くこのものが何であるかを見なさい。」私は尋ねた。「それは何ですか。」彼は言った。「これは出て行くエファである。」さらに彼は言った。「これは全地にわたる彼らの姿である。」そして見よ、鉛の一タラントが持ち上げられた。すると、エファの真ん中に一人の女が座っていた。彼は言った。「これは悪だ。」そして彼はそれをエファの真ん中に投げ込み、その口の上に鉛の重しを投げ下ろした。それから私は目を上げて見た。すると二人の女が出てきた。彼女たちの翼には風があり、彼女たちにはコウノトリの翼のような翼があった。そして彼女たちはそのエファを地と天の間に持ち上げた。そこで私は私に語っていた御使いに尋ねた。「彼女たちはそのエファをどこへ運んでいくのですか。」彼は私に言った。「そのためにシナルの地に家を建てたのだ。やがてそれは整えられ、そこで自分の台座の上に据えられる。」ゼカリヤ書 5:5-11。

アモスの罠は地の鳥を捕らえる。なぜなら、それは、地の鳥が捕らえられることになる間もなく到来する日曜法に先立つ同盟を象徴しているからであり、また、アモスによれば、その同盟はラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチズムへの譴責であって、町では警告のラッパが吹き鳴らされるのに、彼らはそれを聞くことを拒むからである。

町で角笛が吹き鳴らされて、民が恐れないことがあろうか。町に災いが起こり、主がそれを行われなかったということがあろうか。まことに、主なる神は、その密議をそのしもべである預言者たちに示さずには、何事もなさない。獅子がほえれば、誰が恐れないでいられようか。主なる神が語られれば、誰が預言せずにいられようか。アモス書 3:6-8。

咆哮する獅子はユダ族の獅子であり、キリストが御自分の預言の御言葉に封印を施し、またその封印を解かれるときのキリストを表す。2025年の公然の同盟はケスティウスによる包囲であり、決して共存すべきではない二者が共に歩むのを見るとき、神の民の略奪者の象徴が確立される。プロテスタントと同盟し、歩調を合わせたローマというのは撞着語法である。なぜなら、プロテスタントであるとは、ローマに対して抗議することを意味するからである。

これらの内容は次回の記事で続けます。

罠から逃れるにはもはや手遅れ

そして忘れてはならないのは、ローマは決して変わらないことを誇りとしているということである。グレゴリウス7世とインノケンティウス3世の原則は、今もなおローマ・カトリック教会の原則である。もし力さえあれば、ローマは過去の諸世紀と同じ勢いで、それらを今なお実行に移すだろう。プロテスタントは、日曜日を高揚させる取り組みにおいてローマの援助を受け入れようと提案するとき、自分たちが何をしているのかをほとんど理解していない。彼らが自らの目的の達成に余念がない間に、ローマは自らの権勢を再興し、失われた覇権を回復しようと狙っている。ひとたび合衆国において、教会が国家の権力を用いる、あるいはそれを支配することができるという原則、宗教的遵守が世俗の法によって強制されうるといふ原則、要するに教会と国家の権威が良心を支配するものとされるという原則が確立されるなら、この国におけるローマの勝利は確実となる。

神の言葉は差し迫った危険を警告してきた。この警告を顧みなければ、プロテスタント世界は、罠から逃れるには遅すぎる時になってはじめて、ローマの真の目的が何であるかを知ることになるだろう。ローマは静かに権勢を拡大している。ローマの教義は、立法の場においても、諸教会においても、そして人々の心の中においても、その影響力を及ぼしている。ローマは、秘かな奥まった場所に、かつての迫害が繰り返されることになる、その高く巨大な建造物を築き上げている。ローマは、人に悟られぬようひそかに、時が来て打って出るために自らの目的を進められるよう、その勢力を強化している。ローマが求めるのは有利な地歩だけであり、それはすでにローマに与えられつつある。私たちは間もなく、ローマ的要素の目的が何であるかを目にし、そして身をもって感じることになる。神の言葉を信じ、これに従う者はだれであれ、そのために非難と迫害を被ることになる。『大いなる争い』581ページ。

不義と欺きと迷妄のうち、死の陰そのものの中に横たわっている世界がある—眠っている、眠っている。彼らを目覚めさせるために魂の産みの苦しみを覚えているのは誰か。どのような声なら彼らに届くのか。私の思いは、合図が与えられるあの未来の時へと運ばれる。「見よ、花婿が来られる。迎えに出なさい。」しかし、自分のともしびに注ぎ足す油を求めるのを遅らせた者たちがいて、手遅れになってから、油が象徴する品性は人から人へ移すことのできないものだを知るだろう。その油とはキリストの義である。それは品性を表しており、品性は譲り渡すことができない。誰も他者のためにそれを確保することはできない。各人が自らのために、罪のあらゆる汚れから清められた品性を得なければならない。バイブル・エコー、1896年5月4日。

現在の真理を欠くがゆえに死にゆく哀れな魂たちと、真理を信じると公言しながら神の御業を推し進めるために必要な手段を差し控えて彼らを死なせている者たちの姿を見て、その光景はあまりにも痛ましく、私は天使に、それを私から取り去ってくださるよう懇願した。私は見た。神の大義が彼らの財産の一部を求めるとき、イエスのもとに來た若者（マタイ19:16-22）のように、彼らは悲しみながら去っていった。そして間もなく、押し寄せる災禍が通り過ぎて、彼らの財産をことごとく一掃してしまい、そのときには、地上の財を犠牲としてささげ、天に宝を蓄えるには、もはや遅すぎるのである。『初期の著作』49頁。

ユダは、自分の懇願がむなしく終わったのを悟り、「手遅れだ！ 手遅れだ！」と叫びながら広間から駆け出した。彼は、イエスが十字架につけられるのを見届けて生きることができないと感じ、絶望のあまり外へ出て首をつった。『The Desire of Ages』、722頁。